

1930年代東京YWCA「私共の家」における社会事業と教育活動の展開

文学研究科教育学専攻博士後期課程1年
中本かほる

はじめに

東京YWCAはキリスト教を理念とする女性団体であり、105年の歴史を有する。1905年に早稲田大隈邸庭園にて発会式が行われ、それ以来、国籍や階層、年齢や社会的地位を超えて、実に多くの女性たちがこの団体の構成者（会員）となった。東京YWCAは、この女性たちの力を様々な社会活動に転化させた。その社会活動、即ちYWCA活動は、彼女らの「人間形成」に影響を与え、人間的成長を育んだのである。

筆者はこの団体で、職員として、また会員として、30年近く活動にかかわってきた。その年月の中で、社会状況は変り、世代交代がなされていった。2008年、日本においては、100年振りという公益法人制度の改定がなされ、東京YWCAも新たな歩みを始めている。

そもそもこの団体は、明治、大正、昭和、そして現在に到るまで、どのような使命を持ち継続されてきたのだろうか。その使命は、日本の女性たちにいかなる影響を及ぼしたのだろうか。また、この活動を支えた女性たちの思いはどのようなものであったのだろうか。こうした問いに答えるためには歴史を紐解く作業から始めなければならない。東京YWCAは、1930年代という特徴的な時代に、7年という短期間ではあるが、百軒長屋といわれた棟割長屋を改造して「私共の家」と名付けた社会事業を行っている。場所は旧東京市小石川区白山御殿町、小石川植物園と接する小規模な製本や印刷業の町である。この活動についてはまったく記録もなく、東京YWCA周年誌等の年表上に設立と廃止が記載されているだけであった。幸い戦前の東京YWCAの機関紙が保存されていた。そこからこの活動を拾い上げ、その姿を再構成し、「私共の家」がいかなる活動であったのかを実証的に明らかにすることを研究の目的とする。

1. YWCAについて

(1) 世界YWCAの設立

19世紀中期から後半にいたる時期、イギリスは「世界の工場」として繁栄を誇った時代であり、都市では多くの若い女性が労働者となった。YWCA (Young Women's Christian Association) は、その時代に活動した二つの団体に起源をもつといわれている。一つは、「プレイヤーユニオン」(Prayer Union) であり、ロンドンにおいて、産業化の波にさらわれる若い女性たちの状況を憂い、彼女たちがキリスト教の信仰生活を全うできるようにとの精神運動を推進した団体であった。もう一つは、「ホームズ・アンド・インスティテュート・オブ・ロンドン (Home's and Institute of London) と呼ばれる団体である。この団体は、クリミア戦争に行く看護婦など、地方からロンドンに働きに来る若い女性が、安心して宿泊できる宿舎を提供し、そこにおいては、聖書クラス、教育プログラム、クラブ活動、カウンセリング、ライブラリー等をおこない、働く女性のために活動した。この二つの団体が、共に「YWCA」の名を使っていたといわれており、1876年に両者が一つとなりYWCAが誕生したとされている¹。YWCAは、その後、アメリカ・ノルウェー・スウェーデンへと広がり、1894年には世界YWCAが組織され、以後世界各国へと広がった²。もともとの起源とされる二つの団体がロンドンで行った事業、すなわち若い女性労働者のための精神運動と、各種プログラムを備えたホステル事業は、その後世界で展開されるYWCAにおいても共通する事業となり³、それは日本においても同様であった。武田清子は、日本YWCA最初の機関誌『明治の女子』の発刊の辞(1904)「聖書の研究を重視し、キリスト教による『霊性の発達』、人間形成を目指すこと、及び社会関係に関心を持ち『人に与え人より受ける』交わり、人類相互の共通の関心事にかかわってゆく事」から、そこに日本YWCAの基本的テーマ「聖書に学び、福音的キリスト教信仰による人間形成の課題」と「社会的、人類的交わりと社会問題に取り組む課題」の二つが示されていると解説⁴したが、「若い女性労働者のための精神運動と、各種プログラムを備えたホステル事業」は、「キリスト教的人間形成」と「社会問題への取り組み」という使命と特質を表すものであったといえる。

(2) 日本YWCAの設立

日本にYWCAが設立されたのは、日露戦争終結の翌年1905年である。日本YWCAは、ミッションスクールにすでにあったキリスト教グループを、若い女性のためのキリスト教運動のYWCAとして、連携・統合するよう働きかけた。こうして、まずは学校YWCAとしての活動が形成され、続いてミッションスクール卒業生などの家庭婦人を会員としてYWCAが始められた⁵。東京YWCAは日本YWCA設立の一ヵ月後、1905年11月に、津田梅子会長の発会の辞を持って活動を開始した。設立当初から、日本YWCAと東京YWCAは別組織になっており、東京YWCAは寄宿舍などの事業、日本YWCAは学校YWCAの組織と機関紙の発行を受け持っていたが、初代総幹事キャロライン・マクドナルド (A. Caroline Macdonald) は両方の総幹事を兼ね、外部からはほとんど同じ組織と見られていた⁶。1913年横浜YWCAが発足、その後、大阪、神戸、京都、名古屋と各都市にYWCAが発足した。

2. 「私共の家」の設立

(1) 設立の背景

1926年12月、日本は昭和を迎えた。引き続き長期的不況の上、1929年世界大恐慌は日本の資本主義を危機的状況に陥らせた。農漁村は荒廃し、都市には失業者があふれ、労働争議・小作争議等の社会問題は深刻さを増していた。厳しい国内状況を抱え、日本は欧米列強との帝国主義的対立を激化させ、経済の軍事化⁷・重化学工業化を推進し、満州事変（1931）以後中国侵略を強行しファシズムの時期に入っていた。

日本YWCAは設立当初から、女子工場労働者に対する働きかけを使命と考えていた。しかしその実現は容易ではなく「工場講話会」や「工女慰労会」等を行っていたが、労働条件の厳しい工場労働者の自主的活動を生み出すには至らなかった。1927年日本YWCA同盟⁸は労働調査部委員会（委員長：志立タキ⁹、幹事：正田淑子¹⁰）を設置し、婦人労働の実態について種々の調査をおこなうと共に、1930年2月、名古屋ルーテル教会の2階を借り、名古屋インダストリアル・センターを設置し、女工教育、労働事情の調査に着手した。そして、同年5月名古屋千種町に一軒家を借り、婦人求職者のための宿泊施設提供を始めとする「友の家」事業を開始した。1932年からは、YWCA会員に婦人労働の実情を知らせ、労働婦人への奉仕の週間として労働週間を設けた。また各都市YWCAには、有職婦人部が設けられ、1934年には全国有職婦人連盟を組織し、有職婦人部担当幹事（職員）の全国研究会等も開催され、全国的な取り組みが展開されていた。

(2) 「私共の家」の設立

東京YWCAにおいても、1929年有職婦人部の下に労働部の活動開始が決議され¹¹「全ての婦人の正しき成長を希ひ労働に従事する女子の人格を尊び、社会人として正しく起つことの出来る様、女子労働者の教育を持って目的とす。故に女工現在の生活状態及び其の要求を正しく知り工場労働者と密接なる関係を有する農村問題をも研究し、労働者教育事業を為す事」¹²と労働部の方針が掲げられた。1930年には工場世話係、監督の講習会、大井町新興毛織における定期的な事業、工場調査（神田、牛込、小石川）等が開始された。

1930年代の東京には、関東大震災（1923）を契機として生まれたセツルメントを始め、社会の厳しい実情から官民合わせ多くの社会事業が存在していた。1934年刊の『東京市内外社会事業施設一覧』によると、東京市のみで社会教化事業として95の官民の施設（隣保71、矯風2、教化16、融和1、補習教育5）が掲載されている¹³。さらに『小石川区史』（1935）においても、こうした厳しい社会状況を緩和するため、「公的には経済現象の対策として公設市場、公設質屋、宿泊保護、公設食堂、公営住宅、公設浴場等の施設を、要救護者に対しては、方面委員会制度、失業救済の為には職業紹介、授産事業等が行われ、児童保護施設としては産院、託児所、児童相談所、児童遊園地等の諸施設が設けられ、民間でも之に似た各種の施設が起こった」と記されている¹⁴。

東京YWCAによる「私共の家」は、こうした時期に小石川区白山御殿町に設置された社会事業施設であった。徳永直の『太陽のない町』¹⁵は、1926年に発生した「共同印刷争議」を題材としたものであるが、白山御殿町はその共同印刷会社が存在した久堅町と千川を隔てて向かい合っている町である。同町は、「徳川公の御殿跡」という面と、零細な印刷製本工場に従事する労働者が多く住む町という面を併せ持っており、そこで育った娘たちの多くも女工として働いていた¹⁶。町の一部は、「東京市統計年表」（1921～1930）によると、細民区域としての指定を受けていたところでもあった。

1929年、東京YWCAは関東大震災で失った会館を、日本初の女子専用の屋内プールを持つ地下1階地上5階の洋館として再建した。その実現は、東京YWCAにとっては大きな喜びであった。会館は「当時の若い女性憧れの場所」¹⁷となり、更なるエネルギーを生み出し、会の活動は躍進し、会員たちの活動の幅も広がった。

1930年末、「市内の細民30万人」¹⁸ともいわれた困窮を極める人々のために、東京YWCAは「クリスマス奉仕」を計画した。いくつかの候補地を調査検討し、白山御殿町と千住を対象地として米や炭の配給や廉売を主とした奉仕活動が実施された。当初1回限りの奉仕計画であったが、状況の厳しさを実感した会員たちの熱意から、翌年3月まで延長され、最終的には1,920名に対して1升10銭で白米145俵分を廉売、他に木炭50俵、古着等も廉売や配給が計8回行われた。廉売や配給のため、東京YWCAの学生部、少女部、家庭婦人部、有職婦人部全ての会員が何らかの形で関わった。この「クリスマス奉仕」活動を通して、東京YWCAと白山御殿町との関わりは、そこにすむ住人だけでなく、方面委員会や市民館等の組織にも拡大していった。こうした段階を経て、かねてより取り組もうと計画されていた女子工場労働者に向けての事業実施の要件が、白山御殿町で整えられた。

社会事業「私共の家」として本格的な活動を開始するのは、1932年6月小石川区白山御殿町86番地に棟割百軒長屋の壁を抜いた4畳半二間と4畳と3畳という小さな「お家」に引っ越した時からである。

3. 「私共の家」の活動

『文京区史』第4巻（1965）によると、この地域は、低地で顕地で商業地域としては不適當でありながら、「物資ノ供給ハ居住者ノ日常生活ニ不便ヲ感ゼシムル事比較的少キヲ以テ勢ヒ細民カ蝟集シテ集团的ニ生活ヲ営ムデアロウ」¹⁹地域であり、居住地としては不適當であるが、下層階級者にとっての居住設備、労働仲介及び需要機関の設置ある地域であったと記されている。白山御殿町をとり囲む、久堅町、氷川下町、戸崎町四町の特徴を表すと、1925年当時、世帯数6,387人口27,623人の人口過密地帯²⁰であり、製本の比重が極めて高い印刷・製本の町であり、それは「5人以上使用」の零細な下請け家内工業的なものも、女子労働をも吸収するものであったといえる²¹。こうした経済的にも環境的にも厳しい地域であっ

たため、官民の社会事業施設が多く存在していた。また社会事業施設ではないが、白山御殿町には御殿町尋常夜学校²²も存在していた。

表1に見るように、白山御殿町の社会事業施設は近隣四町を含め、医療についてはある程度の機会があり、地域のセンター施設としての市民館が、児童保護、社会教化事業を行い、夜学校が学校教育の補完を担う状況であったといえる。しかし、女工等、女子青年を対象とした事業は無かった。

表1 白山御殿町及び隣接地域の社会事業施設

<社会事業>	<教化事業>
東京市方面委員小石川区第一方面事務所（氷川下） 東京市久堅町市民館 仏教広済会診療所（戸崎） 恩賜財団済生会戸崎診療班 東京府医師会小石川簡易診療所（久堅） 恩賜財団済生会小石川診療所（氷川下） 恩賜財団済生会白山診療班（白山御殿町） 東京興仁会（司法保護）（白山御殿町大雲寺内）	異常児保護として東京力行園（白山御殿町） 司法保護として社会教育協会（白山御殿町） 基督教伝道及び救助として聖ステパノホーム（白山御殿町）

* 『小石川区史』1935年（東京市社会局による1934年調査）を参照し、中本かほる作成

1932年6月、「私共の家」への引っ越しが終わり、工場で働く若い女工と小学校高等科の少女たちの2つのクラブが定期的開催されるようになった。若い女工や少女たち、母たちの「クラブ」²³から「私共の家」の事業は開始されたのである。

表2は、東京YWCA機関紙「地の塩」記事から、「私共の家」の事業を活動形態及び年度でまとめたものである。「地の塩」は、東京YWCA最初の機関紙として1926年7月～1939年3月の間発刊されたものである。1号から64号まではA3タブロイド版、以降最終113号まではB5冊子版である。その紙面は、当初は7～8面のものであったが、徐々にその枚数は増し、冊子版においては70ページを越すような状況であった。第2号には1部4頁金5銭、冊子版になってからは10銭と記されている。機関紙の内容は、会員の近況から広く世界の動きまでが掲載され、その執筆者も幅広いものであった。発行は年10回程度で、機関紙の名称である「地の塩」は聖書の「汝等は地の塩なり」に由来し、創刊号には以下のように記されている。

キリストの聖言「汝等は地の塩なり…」よりその名を得たるものにして、これにより当会はその事蹟、事業、抱負を語り、会員相互の親善を計り、霊・智・体の円満なる発達を遂げ奉仕の精神を養ひ、持って女性の地の塩たらん事を期す（「地の塩」1-7-1926）

表2においては、「私共の家」の事業を、その活動形態等により以下の4種類に区分した。

表2 「私共の家」 事業別集計表

<定期事業>	1932	1933	1934	1935	1936	1937	1938
白百合(女工) 和服裁縫の組 裁縫 編み物	35回8名 週2回8名 〃	○ 月水金の夜 冬 火木土の 夜	23名 16名 6回	21名 月水木金17名	21名 40名 17名	19~25名 6~8名	21名 10名
なでしこ (尋常6~高等科2年) すみれ みどり(尋常4~5年) さくら(尋常1~3年) 復習会	32回6名 13回20名	6名 20名 ○	15名 24名 23名 月水金19名	21名 22名 25名 40名	21名 25名 25名 30名	62~84名	73名 15名
もみじ 幼児	13回20名	20名	11名	30名	30名	22~40名	45名
日曜学校 童謡クラブ 読書クラブ				106名	106名	52~85名	80名 31名 28名
母の会	招待会	○	○	○	8回平均出席 32	母の会結成 8回81~85名	8組110名 会費3銭
<夏行事>							
保田行き 国領 林間学校 駿河台プール 多摩川キャンプ 興望館キャンプ 御殿場	白百合、 すみれ ○ 40名 ○ 40名 ○ 小学生2名 白百合2名	2回 ○ 40名 ○ 小学生2名 白百合2名	白百合、 撫子、みどり 4月 689名 (74名) 2回30人 小学生3名 白百合3名	白百合 1058名 (70~80) 23名 3名 3名	白百合 990名 (平均82) 35名	○ 1日平均 30名 ○ ○	29名 延べ1821名 延べ312名
<年間行事>							
クリスマス 古着市 新年会、針供養 豆まき 雛祭り イースター 国際母の日 国際花の日 感謝祭 遠足、お楽しみ会」	56名 6月12月 小学生招待	○ 11月60余円 奉仕部へ (学資補助等) 駿河台本館	○ 283.81円 動物園他	○ 6月12月 ○ ○ 芽ぐみ会招待他 ○	○ 夏冬2回 100名 5回 ○	108名 ○ ○ ○ 53名 67名 ○	5回292名 50.5円 62名 78名 135名 73名 65名 76名 延べ248名 ○
<その他の事業>							
年末託児 労働婦人講習会 職業相談 人事相談 保健事業			○ 料理18回	○ 料理8回 ○ ○	○ 1銭貯金70口		延べ943名 66~80口

*掲載記事より数値を取り出したが、実施されたが数値不明のものは○とした。その他記載のない部分についても実施された可能性があるが、判断できないものは無記入とした。

(「地の塩」掲載記事より 中本かほる作成)

- ①定期的事業－「私共の家」で行われた事業の核といえる部分で、各「クラブ」、「日曜学校」、和洋裁や編み物の「組」などがあった。
- ②夏行事－キャンプや保田休養所への小旅行、地元の植物園でおこなう林間学校等夏期の事業は、「私共の家」にとっては、活動の一つの山場といえるものであり、クラブ員にとっても楽しみにした活動といえる。これら夏行事参加の為、母親たちは一銭貯蓄を始めている。
- ③年間行事－クリスマス、針供養やひな祭りなど季節的な行事を通し、「クラブ」や定期的に行われている活動に、変化を加えるものである。
- ④その他の事業－主に地域への事業として行われる年末託児や人事相談等。

「私共の家」の事業を、事業対象人数やプログラムの拡大を目安とし、その特徴を表2から見ると、1932年度～1933年度は、「私共の家」が出来、定期的に集う若い女工や少女たちのクラブとそのメンバーを中心としたキャンプや林間学校が開始され、「私共の家」事業の内容が形作られた創設期といえる。1934年度～1935年度は、クラブの充実を基礎に、キャンプやプログラムが人数的にも質的にも拡大され、年末託児や労働婦人講習会等地域へのサーヴィスが開始された充実期、1936年度～1938年度は、母親たちの保健組合や、母の会結成がされると共に「私共の家」が地域にその存在を認知され、「地域の家」として働こうとした成熟期といえる。

(1) クラブ活動を軸とした事業展開

少女たちのクラブは、人数の増加に伴い数ヵ月後2つに分けられ、また幼児のクラブも作られ、合計54名からなる4つのクラブが動き出した。クラブ以外にも、裁縫の組が定期的開催され8名が通い、合計62名のメンバーが通い始めた。彼女たちは、「私共の家」を「お家」と呼び、小さな社会事業がその「お家」を拠点として動き始めたのである。

お裁縫の組には十八人²⁴の人が一週二度稽古に来ます。クラブが始まったのでお裁縫をしたり歌を覚えたりしてます。大きい方のクラブ員は皆それぞれ工場で働き、年は十五～十九位までです。小さい方は小学校高等1年です。近い中にクラブ員とお母さん方のお集まりをしたいと思っています。小さい妹や弟にもクラブを作ってやりたいのです(「地の塩」51-7-1932)

「私共の家」において行われる事業の核をなす部分といえる「クラブ」は、YWCA活動の基本的な活動形態である。若い女工たちのクラブは「白百合」と命名され、「お裁縫をしたり歌を覚えたり」する活動から開始された。クラブの活動は定期的な会合だけではない。初年度から、「白百合」はお盆休みを使い保田休養所²⁵へ出かけた。「毎日工場の中の騒音と塵

埃の中で」²⁶働く娘や少女たちにとっていかに嬉しい出来事であったかは想像に難くない。「地の塩」に保田を担当した渡邊松子幹事（職員）の報告記事が掲載されている。

「私共のお家、白百合会の十五名、はじめて海に入る喜び」

たった一回で一人で浮くようになった時の嬉しさ。それにも増して、広々した屋敷に白麻の蚊帳をつり真白いシーツを敷いて寝ようとする時「一生の中に又とこんな処で寝る事が出来るかしら」という率直な感謝の言葉の洩れた時の涙ぐましい喜びを忘れる事は出来ない。一泊後帰京。（「地の塩」52-10-1932）

その他「私共の家」全体が実施する行事への参加、東京YWCA本館での催物への参加、他地域の女工との合同の遠足、他団体や日本YWCA同盟主催のキャンプや修養会への派遣等、その活動の幅は彼女たちの日常生活の範囲を越えたものであり、そこでの新たな人と社会との出会いは、彼女たちに喜びや楽しみ、そしていくばくかの緊張をもたらしたであろう。こうした経験は、彼女たちの社会的成長を促し、新しい可能性を開いていく。

1933年から日本女子大学社会科（「地の塩」59-7-1933原文のママ）卒業生と現役学生によって、地域の児童に向けた「復習会」が実施された事が報告されている。そこでは白百合メンバーが、助手の役割を担っている。地域のお姉さんである白百合メンバーが、助手を務める姿は、少女たちにとっては、憧れとともに実現可能な自分の将来モデルとして描くことのできる一つの姿だったのではないだろうか。と同時に白百合メンバーにとっても、ボランティアな働きを通して培われたリーダーシップが、より豊かな人間形成へとつながって行ったことは十分に推測される。白百合クラブの活動を通して、若い女工たちに、「聖書に学び、福音的キリスト教信仰による人間形成」と「社会的、人類的交わりと社会問題に取り組む」ことが実践されていたといえる。言い換えるならば労働部方針で掲げた「全ての婦人の正しき成長を希ひ労働に従事する女子の人格を尊び、社会人として正しく起つことの出来る」ための女子労働者教育が実践されていたということでもある。

（2）母の会

同じように「母の会」においても、こうした実践はなされていた。「母の会」はクラブに通う子どもの母親に、クラブ活動の意味の理解と賛同を得るために組織される部分と、母親自身のクラブとして、自治的なグループ活動を目指す部分をもっていった。「私共の家」の場合、事業開始と共に母親招待会が実施されている。当初は話を聞く受身の「母の会」であったが、徐々に母親自身が会の進行をする等、主体的な関わりになった。こうした変化は、「キャンプの為に1銭貯蓄をする」保健組合結成（1936）というような行動力を培い、1937年には白山「母の会」を結成させた。今まで、子の親として参加していた母の会ではなく、会費月額3銭の自分たち自身の自治的クラブである「母の会」が組織されたのである。母の

会には、8人の組頭（委員）が存在し、各組ごとに、母の会会費の徴収、母の会会員と「私共の家」との連絡及び会の活動の推進を図った。1938年12月には110名の親が母の会会員として登録されている。同年度集められた会費総額は34円83銭であった。集められた会費からは集会の一部経費や時節柄、出征祝旗、戦死も含めた死亡者への線香代の他、軍用機献金、母の会が主催した漢口陥落提灯行列接待費、クリスマスへの砂糖寄付等、時局の要望に応えるものや、地域への奉仕的な事柄へも支出された。

（3）地域事業

「私共の家」の活動には、上記「クラブ」を通し形成されていった動きの他に、「地域サーヴィス」として取り組まれた活動がある。家庭調査や要救護世帯調査と慰問の実施、労働婦人講習会、年末託児、相談事業等の実施である。

小さな家は親しみ易いと見えて、戸籍登録の相談から、子供の性行相談、夫婦喧嘩の仲裁から、施療の世話、職業相談等何でも相談を持ちかけられる。少なくともこれらの要求に応じた積りである。単なる救済事業としてではなく、より強き社会生活を営むべく、自立自営の意気と精神の涵養を希つて止まない次第である（「地の塩」93-2-1937）

これらは、「個」の社会的成長に視点を置いた「クラブ」や「母の会」等とは性格の異なる、地域の課題解決に視点を置いた地域事業としての側面を持っているが、こうした事業も最終的にはそこに関わる人の「自立自営」が目指されている。「私共の家」で取り組まれる「クラブ」と「地域事業」は、相互に関連しあう有機的な関係を持っている。「クラブ」の成長は「地域事業」の原動力であり、「地域事業」は「クラブ」の関わる世界を拡張、ともに影響し合い成長していくのである。こうしてYWCAが目指した「キリスト教的人間形成」と「社会問題への取り組み」という活動が、「私共の家」で根を張り定着していった。

4. 「私共の家」の職員

機関紙「地の塩」に「私共の家」に関する記事で名前が記されている職員は10名を数えることができた。渡辺松子、櫻井、山野井ゆき、宮崎貞子、阿部初見、山中しま、石畑とめ、中島澄子、高木栄子、阿山隆子である。彼女たちの多くは日本女子大学校の社会事業学部²⁷を卒業している。

日本女子大学校は、成瀬仁蔵により家政学部・国文学部・英文学部から成る大学校として1901年に創立された。1918年富山県で発生した米騒動を機に、政府や地方公共団体は積極的な社会事業政策を展開し、社会事業や労働問題に社会の関心が高まっていった。そうした気運の中、1921年社会事業学部が開設された。成瀬の後を受けた麻生正蔵校長は学部開設にあたり、「従来の慈善事業に対し、これからの社会事業は、国民の社会生活改善の事業であっ

て、より系統的、専門的、科学的でなければならず、さらに積極的、計画的しかも実務的でなければならないと主張。その実効を十分にあげるためには、女子の参加が必要であると考え、創設以来の精神を今こそ具現、結実すべき²⁸と考えていた。日本女子大学校では、1904年「一種の生涯研究機関およびその研究成果を社会に実現する」²⁹卒業生の団体である櫻風会が発足していた。櫻風会は「事業として児童の預り所を設け其の他種々社会的の仕事營んで微力ながら社会のために貢献している」³⁰実績を持っており、こうした経緯と、社会的必要度の高さから、社会事業学部には児童保全科と女工保全科が設置された。影山礼子は、社会事業学部のカリキュラムの特徴を以下の4点にまとめ、「宗教と科学の調和、行動する事によって学ぶという成瀬の教育の特色が反映されている」³¹と評している。

- ①社会科学的基础知識（法律、社会調査法、社会経済学等）
- ②社会問題への関心（女子職業問題、女工使用問題、農村問題、労使問題、不良少年少女問題、遊戯娯楽問題）
- ③体験重視の実習科目（社会事業演習）→第4学年 各種社会事業機関の見学日（週1）
住み込み実習（1ヶ月＊実習先：日暮里愛隣園、YWCA、YWCA全国有職婦人連盟、櫻風会託児所、東大セツルメント、女子青年館、大塚公民館、片倉製糸工場、等）
- ④倫理学・心理学を重要視（実践倫理、倫理学、社会倫理、社会心理、変態心理学）

「私共の家」に関わった職員の中で、記事の掲載数の多いのは、「山野井ゆき」と「石畑とめ」である。この二人は社会事業学部児童保全科の卒業生である。山野井ゆきは、父親の事業の失敗と死亡により、日本女子大学附属高等女学校を中退、2年半明治生命に勤めたが学問の志が高く、児童保全科に入学。米国の同仁教会婦人部の援助を受け、その施設ブラックマー・ホーム³²から通学した。山野井によると、「当時としては珍しく全館スチームの通った近代建築のホームであり、苦学生や優秀な学生援助の為の宗教団体独自の、善意による施設で、入寮者にはワシントンの教会から学資が支給され、卒業後働いて返金する義務付がなされていた」³³ホームであったという。山野井は病氣療養のため1年の休学を経、実習を東京YWCAの有職婦人部で行い、1932年に卒業した。その後2年半ブラックマー・ホームでの義務を終え1935年に東京YWCAに就職した。

石畑とめも同ホームから通学していた。1928年児童保全科を卒業し、同仁ハウスで長らく働き、1935年に東京YWCAに就職している。YWCA退職後は島津製作所、ベタニヤホーム等で一貫して児童・女工問題の福祉活動に従事していたと山野井は語っている³⁴。

この二人は共に、同仁教会の学資支援を受け、その義務を終え「私共の家」に係わった。YWCA職員は高等教育、専門教育を受けた、女工たちとは別階層の人々といえるが、この二人に見るように、その背景は様々である。YWCAは彼女たちにとっては、社会事業を学ぶ折の実習先であり、職業人としての就職先であった。職員も自活する一人の働く女性である。女工や母親と共に「私共の家」で働くことは、地域の女性たちの社会的自立を促すこと

であると共に、自らの自立の糧であり、また人生における目標でもあった。

小さな社会事業であった「私共の家」は、そこに関わる若い女工や母親また職員を、社会に向かわせ自らを高めていく教育的機能を持った「家」であったといえよう。

5. 「私共の家」の廃止

機関紙「地の塩」2月号はその年度の事業報告号となっており、毎年の活動がまとめて報告されている。1938年度も例年のごとく事業報告がなされた。「私共の家」も詳細な報告がなされたが、その最後は以下のようにまとめられた記事であった。

Yの多難な経済機構の中から、白山の細民地区教化のため本年度も投資された事により無事に過ごすことが出来た。物価高騰による経済力の窮迫や、出征者、戦死者を出して、働き人を失った家庭が出来たりして、地区としてはかなり強力な風が吹き荒んでいる。「私共の家」を通しての年中行事を省みる時、かうした地区の子供等に母親に和やかな空気を贈り得た事を想うて感謝である（「地の塩」112-2-1939）

そして、1939年3月をもって「私共の家」は閉鎖された。「地の塩」3月号紙上には総会の報告がなされ、「私共の家」に関することが含まれているであろうと推測される組織変更に関する結果が報告されている。

総会の議事会決議事項

一、昭和14年度（1939）方針－組織変更

三項共実行する事に可決（「地の塩」113-3-1939）

それまで毎号掲載されていた館外事業一覧中から「私共の家」の名前が消え、機関紙「地の塩」そのものもこの3月号をもって終刊とされた。

「私共の家」が何故廃止になったのかの事情を、1939年1月の東京YWCA幹部委員会記録³⁵からみておこう。

12月幹部委員会に於いて提出の14年度（1939）予算原案に於いては、差し引き約3万9千円の欠損あり。予算の関係上は勿論、時局に際する折柄、基督教女子青年会として今日何を強調すべきかを検討・・・（略）・・・万国委員会の五項目中の一つ、青年層を目指して力を尽くすべきことを14年度の方針と決定。その結果、1 児童に関する仕事 2 二世教育事業 3 社会事業（母子ホームを除く） 4 地の塩 等を一考の余地あるものとして盛んに討議・・・（略）・・・1 白山御殿町の地区事業は開始当時とは違い、府、市の此方

面への救済の手も伸び私団体の此種の事業も興り、周囲の事情は好転の状態にあり、青年会として莫大な赤字の補充（年間約4千円也）に苦しみ、不十分な設備のまま、事業を継続するよりは此際この仕事の永年の成功を成功として一旦打ち切り、社会事業としては母子ホームに会員の関心を集中しては如何（幹部委員会記録1939-1-18）

1939年度、3万9千円という赤字予算の額が、厳しい判断を導き出す直接的理由とみることができる。東京YWCAの財政状況は、国中が日々戦争体制へ向かわんとする中、会員や支持者の減少、事業の減少等厳しい状況を抱えていた。「地の塩」を見ると、東京YWCAは常に会員や支持者の拡大を掲げている。会の財政も常に不足があり、寄付や催し物への協力が訴えられている。そうした状況にありながらも、東京YWCAの財政は、会員の協力と、エマ・カフマン（Emma R. Kaufman）³⁶に代表される外国人幹事たちの協力による、海外からの支援等により、この期までは乗り切ることができていた。

社会事業「私共の家」はその性格上、費用を自営することは厳しく、その負担が東京YWCAにとっても大きな負担となっていた事は幹部委員会記録の通りであろう。東京YWCAは社会事業を、創立30周年記念事業として計画された「母子ホーム」に集中させ、「私共の家」廃止の決断を下したのである。

その決断が下された時を見してみる。前年1938年は、国家総動員法が公布され、国民全体が統制管理される体制が取られた時である。また日本において初めての基本法である社会事業法が公布されたが、この事業法は視点を変えれば指導監督事項による監督的側面の強いものであった³⁷。そして1939年には宗教団体法が成立し、宗教団体は統合され、国民総動員体制が作りあげられていった状況下であった。帝国大学セツルメントでは、1938年5月警視庁特高部に出頭を命じられ、翌日解散声明を出すに至るといような事柄が起きた状況下である³⁸。様々な場面において、強弱はあったであろうが、取締や統制の動きが厳しい状況であったことが推測される。

また東京YWCAの内部では、1938年「私共の家」を担当する幹部委員社会部委員長の辞任や辞退が続き、その結果、社会部の委員長は不在のままであったことが幹部委員会記録（1938-2-23, 3-16, 4-20）に残されている。これは、社会に対し何等かの働きかけをしようとする社会事業という分野が、場合によっては時局と相反するかのような社会的認識が起こりうる状況があり、そうした事に影響されて委員長を受ける人が居なかったのではと推測する事もできるが、事実は不明である。しかし、幹部委員会において「私共の家」の運営を推し進める社会部委員長の不在が何の影響も与えなかったとは考えられない。こうした複合的な厳しい社会情勢が、女子労働者教育を掲げ、細民地区の社会事業として歩んできた「私共の家」の存続する力を東京YWCAに与えなかったともいえよう。

1939年3月の廃止後を幹部委員会記録で追っておきたい。母の会には1939年3月12日（出

席40名)閉鎖の件を発表した。「閉じるにあたっては所々より何らかの方法による事業継続を希望する向きあり」後継者は物色中であるが未決であると、また地区内の軍属者死亡の家族(母親と11歳女兒を頭に5人の子供)への米代として、月10円を3月以降(1939)2ヵ年補助することを決めている。この家族には、方面委員会の尽力も及ばず、軍属故手当、扶助料等何も支給されておらず、特別扶助も未定のままであり、軍人遺家族募金の残金300円が充てられた。この記載以降、幹部委員会記録には、白山御殿町の記録は出てこない。

こうした経過の後、1939年度がどのような決算状況で終わったのかを見ておきたい。幹部委員会記録(1940-2-14)の1939年度の決算予想報告³⁹には、収支予算140,000円に対し収入173,564円30銭、支出167,000円差引き6,500円余の余剰金が出るが見込まれ、その余剰金処理について協議がされたことが記録されている。この結果がどのように受け止められたのかを見る資料にはまだいき当たらず、詳細は不明である。

この後、本格的な戦時体制に組み込まれる中、多くの団体がそうであったように、東京YWCAはその独自の活動を、ほとんど閉じて行くことになる。以下その流れを列記する。

1940年 国際友好部廃止、寢室部閉鎖、外国人幹事全員帰国

1941年 カフェテリア閉鎖、キャンプ取りやめ、女学生クラブ廃止

1942年 少女会員制廃止、保田使用禁止

1943年 日本基督教女子青年会本部の支部となり事務所を日本YWCA同盟に移す

1944年 駿河台女学院廃校

その一方、1942年基督教女子青年会報国団東京支部が結成され、青年会員や職員は報国隊や挺身隊員となって、地域、農村、工場などで厚生福祉活動や体育指導を終戦間近まで行ったのである⁴⁰。

小括

東京YWCA機関紙「地の塩」関連記事から、「私共の家」の歴史を再構成してみた。そこから明らかになったことは、以下の点であった。

第一に女子労働者への関心についてである。YWCAは女子労働者事業からその歴史が始まったが、日本のYWCAもこの課題に向き合っていたことが明らかになった。それは、ロンドンにおいても日本においても、女子労働者の置かれた状況には共通性があり、その時代の女子労働者、広くは女子青年の状況を変革する取り組みであったといえる。

第二に、女子労働者の状況を変革するため、「社会的自立」や「人間形成」といった目標への取り組みが成されていた事が明らかになった。それは当時行われていた皇国の臣民としての教育とは異なる、個を尊重した、自由な要素が多く含まれるグループワークという方法で取り組まれた。

第三には、YWCAの時代と向き合う姿勢の一端が明らかになった。「私共の家」は1930年

代という、大正リベラリズムの余波を残しつつも1940年代へと向かう時代に展開された事業である。挙国一致の国策の中、東京YWCAは「私共の家」事業を抗うことなく廃止させたかのように見える。しかし視点を変えると、事業は廃止したが、事業の本質的な力までもが時代の中で消し去られたとはいえない。そこで行われた、人間の生き方の根本にかかわるさまざまな教育的活動と、それによって実現した人々の学び、またひろく人間形成といった人々の内面によって現される事象は、時を越え、次なる時代にその姿を具体的な形として現してくるものだと考える。こうした形で東京YWCAは時代と向き合い、その中で掲げた目標を追求したといえる。

¹ 日本YWCA『水を風を光を 日本YWCA80年』日本YWCA、1987、pp. 14-15。

² 日本YWCA『日本YWCA100年史-女性の自立を求めて』日本YWCA、2005。

現在のYWCAは、世界事務局をジュネーブに置き、国連の諮問機関（国際NGO）として位置付けている。125以上の国と地域で2,500万人の女性達が活動する各国YWCAは、様々な分野において、各国独自の課題と共に多岐にわたる活動を展開している。

³ 前掲『水を風を光を 日本YWCA80年』 p. 15。

⁴ 武田清子『女子青年界 解説・総目次・索引 解説-日本YWCAの使命と特質』不二出版、1994、pp. 3-4。

⁵ 前掲『日本YWCA100年史-女性の自立を求めて』 p. 3。

⁶ 同上、p. 4。

⁷ 国民経済全体を戦争の軌道にのせること。帝国主義の段階、とくに全般的危機（経済・政治・イデオロギーも含む世界資本主義全体、体制そのものの危機）の時代には、軍国主義が発展し、経済の軍事化を促進する。社会科学辞典編集委員会編『社会科学辞典』新日本出版社、1978。

⁸ 1925年第1回全国総会において会則「基督教女子青年会日本同盟憲法」が決められ本部の名称は「同盟」と呼ぶことになった。前掲『日本YWCA100年史 女性の自立を求めて』 p. 21。

⁹ 福沢諭吉の四女。1918年から1941年（1927年のみ日本不在のため西野清子）の間東京YWCA会長職を勤めていた。

¹⁰ 日本女子大学校英文学部を1904年卒業、1910年コロンビア大学でソーシャルワークを学び1923年に帰国、1926年日本女子大学校社会事業学部長となる。ここでは幹事となっているので、日本YWCA同盟の職員の役割も担っていたとも考えられる。

¹¹ 東京YWCA『東京YWCA幹部委員会記録1929. 9. 18』東京YWCA、1929。

¹² 前掲、『東京YWCA幹部委員会記録1930. 11. 9』1930。

¹³ 東京市社会局『東京市内外社会事業施設一覧』東京市社会局、1934、pp. 133-143。

¹⁴ 東京市小石川区『小石川区史』小石川区、1935、p. 647。

¹⁵ 岩波書店より、1929年に出版された。

¹⁶ 吉田元一氏の談話「12歳位から共同印刷か白山上のメリヤス工場に皆女工に行っていた、仕事は製本専門だね」（2010年7月27日インタビューによる）。

¹⁷ 渡辺松子「東京YWCAが追いつけたもの」東京YWCA『東京YWCA80年の歩み』東京YWCA、1985、p. 7。

¹⁸ 前掲『小石川区史』 p. 655。

- ¹⁹ 東京市役所編『東京市特定区域二関スル調査—1925年調査』1927。
- ²⁰ 全区人口を1000とした各町人口千分率で30以上の町で上位9カ町の中に入る人口過密地帯である(1925年調 久堅町53、氷川下町30、白山御殿町48、戸崎町51)。
文京区『文京区史第4巻』文京区、1965、p. 479。
- ²¹ 同上、pp. 479-481。
- ²² 文京区教育委員会 文化財表示看板「御殿町尋常小学校跡」1989。
白山御殿町41の御殿町尋常小学校に1919年昼間働く生徒のため「御殿町尋常夜学校」を併設。1937年近隣からの出火により校舎全焼、仮校舎に移るが戦争激化により校舎建設に至らなかった1943年廃校。
- ²³ YWCA活動の基本はグループであり、年齢や社会的環境の違い、また興味関心によって分けられることが多い。このグループを「クラブ」と呼ぶ、クラブには指導者がおかれ、クラブ員と共に自治的な活動を展開する。クラブ活動を通し、個人の発達を促す教育的な営みである。基督教女子青年会日本同盟編纂『基督教女子青年会指導者讀本』基督教女子青年会日本同盟、1937、参照。
YWCAは婦人団体であり、青少年団体であり、社会教育機関であると一般に規定されているが、社会事業団体であり、Group Work Agencyであるという規定は、日本においては余り明確にされていないようである。1800年代後半、産業革命によって農村から都市へ流入した若者たちの保護と教育、そして、「自助」育成の理念から出発したといわれるGroup Workは、日本においても、YMCA、YWCAの活動を通して、アメリカ、カナダから取り入れられた。東京YWCAのグループ活動は、「クラブ」という呼び名をもって、学生を対象に1915年に始まっている。1919年には最初のBG(有職婦人)クラブ「湧泉クラブ」が組織され、1924年、学生部とは別に少女部ができて女学生クラブをつくる準備ができた。翌年家庭婦人のもより会が始まり、BGクラブもその数を増していった。1926年、少女部に専門家ローさんを迎え、女学生クラブはますますさかんになると同時に、キャンプによる人間教育を取り入れ始めたが、これも、キャンピングという小単位にリーダーがついて、生活を通しての総合関係をつくる中での人間の成長と変化を目指したのである。前掲、梶美津保「東京YWCAとグループワーク」『東京YWCA80年の歩み』p. 9。
- ²⁴ 記事中は18人となっているが、年間報告号(「地の塩」55-2-1933)には8名と記載されている。
- ²⁵ 千葉県保田元名海岸にある東京YWCAの職業婦人のためのキャンプと休養所施設(1922年に開設)。
- ²⁶ 東京YWCA機関紙「地の塩」(52-10-1932) 東京YWCA, 1932。
- ²⁷ 1921年開設(女工保全科・児童保全科)、修業年限4年。
- ²⁸ 日本女子大学社会福祉科五十年史委員会編『日本女子大学社会福祉科五十年史』日本女子大学、1981、p. 66。
- ²⁹ 影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想—成瀬的プラグマティズムと日本女子大学校における教育—』風間書房、1994、p. 253。
- ³⁰ 櫻風会『家庭週報第633号』櫻風会、1921。
- ³¹ 前掲、『成瀬仁蔵の教育思想』p. 232。
- ³² 同仁キリスト教会宣教師ミス・アズバン(Catherin M. Osborn日本女子大英文科で教鞭もっていた)からの要請で、アメリカの教会員ブラックマー(Lucean Blackmer)が多額の寄付をし建設された。当初貧しい少女たちの家であったが、日本女子大学校の近くにあったため、同校の学生の入寮希望者が増え、当初の性格に加え「女子大生の寮」のようにもなった。赤司道雄編『同

仁キリスト教伝道百年史』キリスト教同仁社団、1990、pp. 20-21。

³³ 山野井ゆき氏より聴取『めじろ路—日本女子大学校社会事業部卒業生のあゆみ—』日本女子大学、1978。

³⁴ 前掲、『めじろ路』。

³⁵ 幹部委員会とは、市YWCAの最高意思決定機関である年会（総会）で選挙された幹部委員によって構成される。選出された幹部委員から役員（会長・副会長・書記・会計）を互選、会長は各部委員長を任命する。「年会で定められた大綱内において幹部委員会は全ての政策を行なう権利が与えられ、又各部委員会は幹部委員会の方針に従う範囲内でその事業遂行に適宜の配置と計画とを為す事が出来る」。幹部委員会は原則月1回開催され、幹部委員会記録はその記録である。前掲、『基督教女子青年会指導者讀本』参照。

東京YWCAの戦前の多くの記録や資料は、殆ど関東大震災や東京空襲等で焼失したとされる。この幹部委員会の記録はそうした中、不完全ではあるが貴重なものとして保管されている。現存しているものは①1923年9月～24年6月②1924年9月～26年12月（26年11月はなし）③1927年1月～30年12月④1931年1月～35年12月⑤1936年1月～40年12月⑥1941年1月～44年4月のものである。

³⁶ ドイツ系カナダ人（1881-1979）、1914年より東京YWCA無給幹事として1940年まで勤務、その間外国人総幹事、副総幹事職を歴任。彼女の個人資産の多くを東京YWCAの土地建物を始とし多くのプログラムに提供した。また彼女の資金で会員職員その他多くの指導者達が海外留学や国際会議に派遣された。自身の資産だけでなくカナダ、アメリカ等のYWCAへ積極的な寄付の呼び掛けを行い、日本のYWCAに多額の寄付をもたらした。

塩野幸子編著『カフマン讃歌』東京YWCA、1985、参照。

³⁷ 吉田久一『日本社会事業の歴史』勁草社、1995、p. 164。

³⁸ 宮田親平『誰が風を見たでしょう ボランティアの原点・東大セツルメント物語』文芸春秋、1995、pp. 210-213。

³⁹ 総会開催日程の関係で、会計年度途中で決算を見込まなくてはならないため予想報告となる。決算時と大きく数字が変わる事はない。

⁴⁰ 前掲、『東京YWCA80年の歩み』 p. 8。

資料1 東京YWCA機関紙「地の塩」における「私共の家」関連記事一覧

「私共の家」関連記事年表		号数	発行年月日	記事表題
1930年11月	細民地区に対する奉仕を決め調査実施(クリスマス奉仕委員会)	36	1930(s5)年 11月28日	クリスマス奉仕計画
12月	12/4白山御殿町訪問 白山御殿町21家族96名に対し年内に一人平均1日米1合を1週間分配給、適した古着配給を決定	37	12月2日	クリスマス奉仕 千住を尋ねて古着募集の結果について
	12/24古着と米引き換え券を配布12/25. 6 30世帯120名に白米配給	38	1931(s)年 2月10日	クリスマス奉仕
1931年1月	1/24第2回めとして米と木炭配布 廉売が検討される			
3月	4回の廉売を実施、白米24石 購入人数720名1升10銭(最終的には計8回実施)	39	3月24日	クリスマス奉仕収支報告 お米の廉売に行つて
	1931年度毎週水曜 有職婦人部 出張集会を実施	47	2月9日	年報(その三)有職婦人部
10月	白山御殿町に間借りする	51	7月5日	有職婦人部報告 労働婦人部『私共のお家』
12月	12/25久堅町市民館にてクリスマス会計画約600名の小学児童参加	46	1931(s6)年 12月	クリスマス奉仕計画に就いて
		47	1932(s7)年 2月9日	奉仕(その一) 奉仕一覧 白山御殿町クリスマス クリスマス奉仕金収支
1932年3月	ひな祭り 小学生クラブ、少女部日曜学校に招待される	55	1933(s8)年 2月9日	有職婦人部
5月	5/15白百合会(白山御殿町)の7人と新興毛織(大井町)2人と労働婦人部で国領遠足に行く	50	5月25日	青葉の国領 労働婦人部国領遠足の記
6月	「私共のお家」に引っ越し(小石川区白山御殿町86番地)裁縫の組 週2回18人 クラブ開始 ゆかたの廉売2回実施	51	7月5日	有職婦人部報告 労働婦人部『私共のお家』
7月	7/15白ゆり会 保田1泊旅行 7/26すみれ会 保田1泊旅行	52	10月7日	有職婦人部報告 労働婦人部 白百合会及びすみれ会保田行の記 白山御殿町小学校生徒林間学校記
8月	8/2~31カード階級小学校女子部欠食児童を主として林間学校(植物園にて)実施 母親招待会			
12月	12/19古着廉売(数日前古着廉売券配布)	53	11月11日	クリスマス奉仕 委員会報告
	12/25クラブ員と家族対象に(56名)クリスマス	54	クリスマス号	クリスマス奉仕 白山御殿町古着廉売の景
		55	1933(s8)年 2月9日	クリスマス奉仕一覧 昭和7年12月奉仕事業会計報告
1933年7月	7/24からミドリとモミジクラブは週2回林間保養を復習に過ごした 駿河台会館プール行き(土曜午後) 7/15.16白百合会保田1泊旅行	59	7月18日	有職婦人部 白山御殿町私共のお家
		62	1934(s4) 2月11日	復習と読書会 労働婦人「私共の家」
8月	白百合会より選ばれた2名御殿場修養会に参加、小さいクラブからは興望館キャンプに2名参加 「私共の家」朝昼夜と終日開放	60	10月1日	夏季事業報告(その五) 小石川区白山御殿町「私共の家」の夏休み山野井ゆき
		62	1934(s4) 2月11日	労働婦人「私共の家」
11.12月	11/26古着廉売(予定12/25)	61	12月	子どもクリスマス行事一覧表

	12/26「私共の家」付近児童の為のクリスマス	62	1934(s4) 2月11日	今年のクリスマス奉仕 労働婦人 「私共の家」
1934年2月	2/20青年会で親睦会	73	1935(s10)年 2月11日	昭和9年度事業
4月	幼児(満4歳以上年齢)サクラ(小学1.2年)ナ デシコ(高等1.2年)クラブ開始	68	1934(s9)年 6月2日	白山、私共の家
	4/1尋常科卒業生国領へ遠足	73	1935(s10)年 2月11日	昭和9年度事業
5月	東京YWCA館外事業一覧に「私共の家」細 民地区事業として掲載される	67	1934(s9)年 5月20日	東京YWCA館外事業
	5/6子供会、全員で植物園に(約70名)お昼は 赤飯3時にはおやつ欠食児童お腹一杯食べ幸 福そう 5/25母の会 白百合会が司会進行子 供たちお小遣いの儉約の他雑巾さしや新聞折 で夏の行事に向け貯金	68	6月2日	白山、私共の家
6月	家庭調査実施	69	7月15日	私共の家 白山御殿町家庭調査の 一時
	7/15.16保田1泊旅行 浴衣セール	73	1935(s10)年 2月11日	昭和9年度事業
8月	7/30~8/27 林間学校(月・木)11回689人 プール(土曜)2回30人 8/16納涼会(白百合 参加)会館 8/3~8/9御殿場修養会(白百合3 名)派遣 8/10~8/23興望館キャンプ(子供ク ラブ3名)派遣 8/12.13撫子、みどりクラブ 保田1泊旅行	70	9月25日	白山御殿町「私共の家」夏季事業 の一端を…(宮崎貞子)
9月	9/15夏の思い出会(会館) 9/30子供会(植物 園)	73	1935(s10)年 2月11日	昭和9年度事業
10月	10/21白百合会遠足 東京見物			
11月	11/17~12/22編み物講習会			
12月	12/1~15電話局員料理講習会 12/12.13白山御殿町要救護世帯調査 12/15久堅町市民館託児所のクリスマス応援 12/22つばみ主催クリスマスに招待される 青年会クリスマスに白百合会参加 12/25~31付近幼児の為託児所開く 12/27付近要救護世帯慰問			
1935年1月	1~5月料理講習会 電話局勤務交換手の為	83	1936(s11)年 2月11日	社会部 私共の家
	1/28活動写真会 子供の為			
2月	2/8針供養			
3月	3/5ひな祭り			
	3/16母の会 白百合会挨拶、笑話劇	75	4月29日	私共の家 母の会3月16日
4月	4/7阿部先生山野井先生送迎会	83	1936(s11)年 2月11日	社会部 私共の家
5月	五月人形寄付(家庭婦人部高島先生)節句のお 祝い(幼児クラブ)	76	5月23日	私共の家 白山幼児クラブのお節 句
	渡辺松子先生洋行のお祝いに白百合会「紙折 内職」でうちわを送る	78	7月19日	社会部(山中) 小さい贈り物

1930年代東京YWCA「私共の家」における社会事業と教育活動の展開

6月	6/29母の会約50人、お母さん達の間から当番をつくり自分達自身の集まりにする相談が出来た 浴衣廉売 売上高16円6銭 6/22家庭婦人部婦人工場従業員招待に白百合参加「あわてもの」3場の余興する			母の会 浴衣廉売 婦人工場従業員招待
7月	7/15.16白百合会に資生堂工場に働く人々を加え20名で保田1泊旅行 7/25～8/201週に4回終日植物園にて林間学校、小学児童70～80人、延1058名、昼食の給食実施	79	9月14日	「私共の家」保田行-林間学校-プール_キャンプ(山野井ゆき子)
8月	8/10～20東京児童指導者会主催共同キャンプ(多摩川キャンプ)に23名(尋常2年～高等2年)加入			共同キャンプ 社会部
9月	9/25母の会	80	10月25日	私共の家 母の会(山野井)
11月	11/27.11/29感謝祭の夕食招待(家庭婦人部「芽ぐみ会」のおねい様方から)「私共の家」139人分と近隣82軒へ	82	12月2日	家庭婦人部 芽ぐみ会の感謝祭 私共の家 感謝祭
	11/10日曜学校開始 11/26感謝祭のお祭り	83	1936(s11)年 2月11日	社会部 私共の家
12月	12/19古着市	82	12月2日	社会部 昭和10年度クリスマス奉仕
	12/20クリスマス 久堅市民館託児所クリスマス応援と私共の家クリスマス祝会 12/20～30付近幼児の年末託児	83	1936(s11)年 2月11日	
1936年2月	至急お願い、次の書をご寄付ください	83	2月11日	社会部 辞書、教科書等の依頼
3月	3/1お雛祭り100名近い集い、撫子クラブ司会、各クラブの発表、厳戒令下ではあったが子供の世界のみはいつも和やかで楽しく平和 幼児クラブピクニック 31名大塚公園3/15白百合クラブ21名憩の家へ	85	4月10日	社会部 お雛祭り ピクニック二つ
4月	今日は早舟さんあたりで母の会をと出かけた。(この地区に出張っての母の会は初めて) 青年会のはおやしきの品物で立派な他所ゆきになる	86	5月10日	A地区の集い ジャンブルからの声
6月	夏行事の為の寄贈品依頼 4畳半長屋3棟26軒調査	87	6月10日	社会部 白山夏期事業の予告 B地区の発見(白山御殿町96番地)
	6/14国際花の日 献金の奨励(貧しくとも幼くとも人々を喜ばす天使になりうるの実感を味あわせたい)大塚病院お見舞い	88	7月10日	社会部 白山だより
7月	7/15. 16保田1泊旅行 山本螺施工場、河野さんの染色工場で働く女工さん、市営バスの車掌さんその他20名で	89	9月18日	社会部 「私共の家」の夏
8月	8/3～28 林間学校16回平均出席82名延990名来訪者13名 8/26～31多摩川共同キャンプ35名引率			
9月	9/26林間キャンプ報告会(社会部) 9/30お月見(白百合、裁縫)	90	10月16日	社会部歴
10月	保健組合開始(キャンプに向けての一銭貯金)	93	1937(s12)年 2月11日	社会事業「私共の家」(白山御殿町教化施設)
	10/19母の会 芋掘り	90	10月16日	社会部歴

	10/21百合クラブ料理「オヤツの作り方」			
11月	11/11百合クラブ料理			
	11/13. 16. 18芽ぐみ会「感謝祭」	92	12月19日	家庭婦人部芽ぐみ会報告
12月	年末託児	90	10月16日	社会部歴
	12/12白山ジャブルセール			
	12/19クリスマス			
1937年 1月	新年会	103	1938(s13)年 2月11日	「私共の家」年間数値報告表及び 状況を記す文章
2月	豆まき、針供養(女工)			
3月	雛祭り、イースター 3/28白山御殿町火災			
4月	卒業祝会			
5月	大日本連合母の会「母の日」に参加			
6月	「母の会」結成 会費月額3銭 国際花の日			
7月	7/15. 16保田キャンプ 7/22～31多摩川キャンプ	99	9月10日	夏の社会事業 私共の家にて 或る日の林間学校 共同キャンプ お盆の中日
8月	8/3～26林間学校 水泳			
11月	人形芝居	90	10月16日	社会部歴
12月	12/1～3芽ぐみ会「感謝祭」の御馳走	102	12月15日	催報告「私共の家」感謝会
	クリスマス	103	2月11日	「私共の家」年間数値報告表
1938年 1月	新年会	112	1939(s14)年 2月10日	社会事業「私共の家」
2月	豆まき			
3月	ひな祭り、卒業、入学、就職祝会			
4月	イースター祭り、母の会			
5月	児童愛護週デー、幼児遠足、レクリエーショ ンの集い、国際母の日の集い、子供会			
6月	レクリエーションデー、国際花の日の集い、 第一陸軍病院慰問			
7月	古着市、保田キャンプ行、タマ川キャンプ			
8月	8/3～25林間学校	109	9月10日	林間学校、多摩川キャンプ
10月	10/19銃後援強調週間、出征家族慰問(芽ぐ み会)	110	11月10日	白山御殿町出征家族慰問記
11月	感謝祭(芽ぐみ会)	112	2月10日	社会事業「私共の家」
12月	出征家族Xマス(芽ぐみ会)、女工さんのXマ ス(有職婦人部)、母の会Xマス、幼児クラブ Xマス、学童Xマス 年末託児			
	*館外事業一覧中に記載なし	113	1939(s14)年 3月20日	東京YWCA館外事業

備考

- ・東京YWCA所蔵機関紙「地の塩」(1926年～1939年発行)をもとに作成した
- ・名称については原文表記を使用、漢字・ひらかなは、当用漢字・語句を使用した
- ・事業実施順を優先した
- ・作成者 中本かほる

Social Work and Educational Activities at “Our Home” of Tokyo YWCA in the 1930’s

NAKAMOTO, Kahoru

Tokyo YWCA implemented a social work program called “Our Home” from 1932 to 1939 in Hakusan-goten-machi, Koishikawa-ku, Tokyo. At the time, there had been a lot of activities implemented at “settlements” that had been established to support the people suffering from the Great Kanto Earthquake in 1923. Compared with these activities, “Our Home” had the prominent feature of providing learning opportunities to young female laborers.

The aim of this paper is to make clear how and why the Home was established and eventually closed.

Hakusan-goten-machi was a town with a dual identity at the time, as it was a community with many small printing and publishing factories in an area that had once been one of the Tokugawa shogun’s palaces. Many young female workers lived in this special town.

The Japanese economy had been getting worse and the serious recession after World War I jeopardized the daily lives of citizens in Japan. The Great Depression broke out after the New York stock market collapse, and it was said that there were about 300,000 deprived people in Tokyo at the time. Tokyo YWCA then planned and conducted “Christmas service” to help such people in extreme poverty. Tokyo YWCA designated Hakusan-goten-machi and Senju as areas for starting services such as distribution and bargain-selling of rice, coal briquettes and so on. This voluntary service led to establishment of “Our Home.”

In 1932, a “Club” was organized in “Our Home” for these young female workers, girls and their mothers. The activities at the “Club” helped the women get various experiences so that they could enrich their lives with a wide range of activities. Furthermore, “Our Home” extended its social work to various areas such as operating a summer school, a nursery, and a consumer cooperative for mothers, etc. However, continuation of many social work programs became difficult with the rise of nationalism after the Manchurian Incident, and finally “Our Home” was closed in March, 1939.

In this paper, the history of “Our Home” is traced from its establishment to its closure, drawing upon scarce remnants of Tokyo YWCA’s official publications of the time, while taking into account the lives of the staff at “Our Home.” Many of the staff who engaged with “Our Home” had learned social work at Japan Women’s University (Nihon Jyoshi Daigakkou).

An attempt is made to focus on and consider some other aspects such as the education and development of the staff, as well as the relationship between Japan Women’s University and the YWCA.

Based on the above, some light is thrown on the ideal of young womanhood that one women’s organization proclaiming Christianity pursued through the activities of “Our Home.”